

視察・研修報告書

視察・研修先	第80回全国都市問題会議
開催日・実施日	2018年10月11日(木)～10月12日(金)
場 所	新潟県長岡市 アオーレ長岡
テーマ	市民協働による公共の拠点づくり
講 師	本郷和人東京大学教授・磯田達伸長岡市長・前葉泰幸三重県津市長 隈 研吾建築家 東京大学教授・森民夫筑波大学客員教授 森本千絵アートディレクター・牛山久仁彦 明治大学政治経済学部教授 楠瀬耕作高知県須崎市長・伊藤香織東京理科大学建築学科教授 奥山千鶴子 NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会理事長 羽賀友信長岡市国際交流センター「地球広場」センター長
概 要	
<p><b>基調講演 「地方分権へのまなざし」</b> 本郷和人 東京大学史料編纂所教授 ～日本は昔から中央集権であったか～</p> <p>(1) 日本最古の貨幣(708年鑄造)和同開珎が用いられたのは、都の周辺のみであり、その他の多くの土地では絹や米などの物々交換が普通であった</p> <p>(2) 江戸時代、300諸侯でそれぞれの藩、地域で教育があり、英才が育てられた</p> <p>(3) 黒船が明治維新を生み出した</p> <p>① 世襲に囚われず、才能を登用する⇒各地の英才が東京に集まる</p> <p>② 万世一系の天皇を核とする、強力な中央集権が図られた</p> <p>③ 明治の達成は高く評価するが、過度な受験秀才の重用をどう捉えるか</p> <p>(4) 現代の黒船はなにか⇒人口減少</p> <p>① 今こそ、明治の中央集権とは逆に、地方の自治権を強く後押しするべき</p> <p>② 地方からのボトムアップこそが、新しい日本を支えていく</p> <p><b>主報告 「長岡市の市民協働」</b> 磯田達伸 新潟県長岡市長</p> <p>(1) 長岡市の歴史</p> <p>① 初代藩主牧野忠成による開府から400年、から150年の節目の年</p> <p>② 北越戊辰戦争後、支藩から見舞いとして送られた米百俵を、教育の大切さを説いて国漢学校設立の資金に充てた</p> <p>③ 「何事も基本は人。人づくりこそすべての根幹である」という考え方は、現在の長岡のまちづくりに生かされている</p> <p>④ 長岡藩三島億二郎により「ランプ会」が発足、士族や町民の垣根を超えた復興策や新しい時代への商工業など「土民協働」によるまちづくりが、長岡の今を築いた</p> <p>(2) 長岡市の市民協働</p> <p>① 平成24年6月「市民協働条例」制定。条文から施策の検討まで市民委員と市がひざ詰めで創りあげた手づくり条例、「地域コミュニティ活動の推進」を掲載</p> <p>② 市とNPO法人が協働で運営する「ながおか市民協働センター」は、平成24年度、88団体から平成29年度は227団体へ(市民が主役・行政は黒子)</p> <p>③ 市民協働の場である「アオーレ長岡」は建築家隈研吾による設計であり、2020年</p>	

東京オリンピック・パラリンピックにおけるインバウンドの誘客効果も期待できる

(3) 人づくりと未来への投資～新しい米百俵～

- ① 平成 27 年 10 月「長岡リジュベネーション～長岡若返り戦略～」制定。学生を含む 30 代までの若者からなる理事会で事業方針や予算配分を決め、若者自らが長岡の魅力発信やまちの活性化に取り組んでいる
- ② 「米百俵の精神」を受け継ぎ次の 100 年を創り出す人づくりと、未来への投資として「新しい米百俵」に全力で取り組んでいる

一般報告 「市民との対話と連携で進める津市の公共施設マネジメント」

前葉泰幸 三重県津市長

(1) 住民自治の伝統

- ①平成 18 年 1 月、10 の市町村が合併し人口 28 万人の新・津市が誕生
- ②藤堂藩 32 万石の城下町。伊勢神宮の参拝客で宿場町として賑わってきた
- ③近代は、紡績、食料品、造船、電気、輸送機器のものづくりのまちとして発展
- ④市民は、自分たちのことは自ら決める自治の伝統を有し、市政に対する関心は高い

(2) 公共マネジメントにおける市民との意思疎通

- ①住民自治の伝統を踏まえ、市民との意思疎通に留意し合併後の公共施設の統廃合に取り組む
- ②過去からの経緯による第 3 セクターの経営問題（赤字）を公共施設マネジメントの手法で乗り越えた
- ③地域住民の関心の高いテーマである文教施設（小中学校）の統廃合を住民と知恵を絞って成し遂げた
- ④新しい時代のコミュニティ施設やエリア再編を市民の手で青写真を描き実施
- ⑤老朽化した施設や使い勝手の悪い放置された施設など、現状から脱却するきっかけは住民の意見反映であり、地域住民自身のものとなった

一般報告 「場所の時代」

隈研吾 建築家 東京大学教授

(1) 場所を主役とする時代の到来

- ①不況の 1990 年代、経済を超越できる場所にこだわって設計する建築を考えた
- ②その場所でしか手に入らない材料と、場所を熟知した職人、気候、環境と調和し、人々が本当に必要としている建築をつくる
- ③工業化の時代から地域に根ざした企業が生き残る場所を、主役とした脱工業社会へ

(2) 都市主義の終焉としての 3・11

- ①20 世紀以前各地方、各場所には建築技術や材料が存在し、独特の景観と文化を築き上げていたが、コンクリート、鉄などにより全て破壊されていった
- ②建築でいえば、コンクリート、鉄などの材料は、都市主義の産物だった
- ③強いと思われたコンクリートと鉄の構造体は、大自然の前ではひとたまりもない

(3) コンクリートから木造やレンガ造りへ：都市から地方へ

- ①地方を廻り、地元の職人達と一緒に仕事を経験。小さな場所の材料、技術、職人を大事にすること

- ②地元の材木やレンガ等、小さなエレメントで出来た建築は一人でも組み上げが容易
- ③3・11 後、どうつながかがテーマとなる。場所と建築がつながり響き合えば、自然と人が集まりコミュニティが育っていく

## 一般報告 「場所の時代」～アオーレ長岡の発注者として～

森民夫 筑波大学・近畿大学客員教授：前長岡市長

### (1) アオーレ長岡の受賞歴

- 第25回ニューオフィス奨励賞 ○グッドデザイン賞 ○第14回日本免震構造協会賞
- バリアフリー・ユニバーサルデザイン推進功労者表彰など 13 の受賞

### (2) 長岡市の中心、長岡城跡地に建設

- ①本丸跡地に長岡駅を建設。長岡駅から空中回路で雨・雪に濡れずにアオーレ長岡へ
- ②ナカドマ（屋根付き広場）天気を気にせず利用できる全天候型巨大空間
- ③アリーナは、大開口扉を開けばナカドマとの一体的な利用が可能。約 5000 人収容
- ④市役所、議会も一体となった全国初の公共施設
- ⑤市長室ガラス張り、1 階にガラス張りの市議会議場、市民に開かれた議会を目指す
- ⑥市民協働の拠点の創出。市役所と一体的に市民がイベントを行うハレの場を整備

### (3) 箱もの反対⇒ミニ集会を 100 回以上開催し丁寧に市民と市議会に説明

- ①市民が使いたくなる質の高い空間は、市民の自由な発想のイベントが生み出される

## 一般報告 「アオーレのサイン計画」

森本千絵 アートディレクター

### (1) 人が集まり、人が活かされる場のイメージ、鳥が来て飛んでいくアオーレバード

- ①永遠に飛び立つ鳥のイメージを信楽焼でサインをつくる
- ②案内看板ではなく人による案内にたくワークショップを重ね、鳥のマークを商工会員・小中学生・高齢者に必要な場所に置いてもらい、サインを設置した
- ③アオーレは、建物が分断されないように建物の外側に縁側がつくられている。それは、人が集まりつながり、賑わいにつながる場であり、サインも賑わいの手助けになればと多くの市民に参加してもらった

### (2) アオーレバードに込める想い

- ①世代や地域をこえて、自在に飛んでいく。ずっとみんなが大切にしてきた、長岡でたくさんの人の想いを運びながら、アオーレから外へ、外からアオーレへの願いを込めた

## パネルディスカッション 「市民協働による公共の拠点づくり」

コーディネーター：牛山久仁彦 明治大学政治経済学部教授

※人口減少・高齢化・激震災害という厳しい状況の中で、公共の拠点・担い手づくりを行政と市民との協働でどのように作り出していくのか？協働のあり方、進め方をテーマに話し合いを進めたい。

パネラー

【楠瀬耕作 高知県須崎市長 ～人・モノ・金の好循環を目指して～】

- ①平成2年から人口減少 33,000 人⇒22,000 人。高齢化率 40%、若者が都市へ流出 2040

年消滅可能都市へ。しかし、市民との協働は、なかなか難しく市民になじまない

- ②2012年「持続可能なすききづくり」を標榜し、住民の自治力強化に取り組んでいるが、南海トラフ地震津波等に対峙するため、7地区の公民館を中心に自主防災組織等の取り組みと人材育成や心の拠点づくりを基本に実施中
- ③市街地再生に向け空き家を利活用し、地域おこし協力隊と地域課題の解決を図っている  
パネラー

【松本武洋 埼玉県和光市長 ～地域包括ケアを支える新たな拠点づくり～】

- ①約150年という短期間で人口が急増し、従来の農村型の集落を基盤とした地域コミュニティとその数倍に及ぶ新住民のコミュニティが存在し、地域と人のつながりが複雑かつ希薄に（平均年齢41歳・高齢化17%・年少人口14%）
- ②和光北インター地域では企業の巨大な流通倉庫がオープン。数百人規模の雇用が生れる
- ③地域運営によるコミュニティセンター、地域センターは、自治会活動や地域包括ケア、子育て活動、市役所の行事も行われ地域活動の受け皿として機能
- ④新たな展開としてNPO法人による、まちかど健康相談室や、もくれんハウスを設置し、妊娠から青少年期まで切れ目なく支援する、わこう版ネウボラ制度を開始
- ⑤地域包括ケアの拠点、包括支援センター、デイサービス等は、民間が担っている。市民との協働は施策の一角を担うのみならず、参加・協働による地域への愛着を形成する  
パネラー

【伊藤香織 東京理科大学建築学科教授

～シビックプライド醸成のコミュニケーションポイントから考える「拠点」～】

- ①シビックプライドとは、都市に対する市民の誇りであり当事者意識に基づく自負心。
- ②シビックプライドは、まちの象徴となるものやこと市民の行動として表れてくる特性
- ③市民と都市との接点となるコミュニケーションポイントが公共建築物であり伝えるための場であり、それはデザインできる
- ④市民協働による公共の拠点としての場のあり方のポイントは、一人ひとりの創造性がまちを変えられるというイメージできるような場、理解するだけでなく体験できる場であり、意見交換する場であることが求められる

パネラー

【奥山千鶴子 NPO法人子育て広場全国連絡協議会理事長

～子育て視点から見た公共の拠点づくり～】

- ①孤立した状況で子育て中の親たちと、商店街の空き店舗を借りて子育てひろばを開設、厚生労働省「つどいの広場事業」創設のモデルとなった
- ②横浜市の「つどいの広場事業」を受託、5年に一度の審査を受けながら横浜市が策定した「市民活動との協働推進の基本指針」により各区（18区）を拠点に、子育て活動団体等と協働で地域や専門機関と人材育成とネットワーク化を進めている
- ③これからの地域子育て支援拠点（全国約7,000カ所）の役割は、児童虐待の増加は、個々の家庭の問題としてだけ捉えるのではなく、社会の構造的な課題（少子化、核家族化、都市化等）として考え、子育て支援のコーディネーターの更なる充実が必要である

パネラー

【羽賀友信 長岡市国際交流センター「地球広場」センター長

～長岡の市民主体のまちづくり～

- ①平成13年、市民活動拠点として長岡駅前にながおか市民センターが設立。人が集まる「場の効用」を重視、見える化を図ることにより市民が活動する姿が共有され市民活動が活発になっていった
- ②中越地震は、長岡市と合併予定の地域が被災地となり、復興プロセスで地域課題を解決する第三者機関として、数多くのNPOが立ち上がる
- ③各集落で住民参加型の復興市民会議が開かれ、住民の意思が反映され意見を第三者機関が集約して行政に手渡された。住民と行政の意見が直接ぶつかり合うことが回避された
- ④地域復興支援員設置支援制度や地域おこし協力隊が設置され、ファシリテーターやプレゼンターの育成など、自立心の強い人材が多く育成された
- ⑤東日本大震災に対応するため「長岡協働型災害ボランティアセンター」設置。専門性の高いNPOや各種団体と社会福祉協議会が連携し緊急支援を行っている
- ⑥「アオーレ長岡」設置の検討と合わせて市民協働条例の必要性も問われ、3年の年月と多世代、多地域で1,000人がワークショップに参加。このプロセスで人材が育った
- ⑦「アオーレ長岡」の運営は、NPO法人ながおか未来創造ネットワーク。市民協働センターの運営は、NPO法人市民協働ネットワーク長岡が行っている
- ⑧市民協働センターは、相談状況は850件、2,500万円から3,000万円規模の支援。単に各市民団体のサポートのみならず、様々な主体をつなぐことで双方の相乗効果をつくり出すハブとしての重要な役割を担っている

一階にある市長室



長岡市議会会議場



## 所感

- ①市民協働は、核となる人づくりが必要であり、市民自らの参加意識がないと難しい。その参加意識、やる気を起こさせるきっかけづくりが重要ではないか。
- ②長岡市の場合、米百俵の歴史がありその心が脈々と受け継がれている。人材育成は、まず人材をつくり、活躍しやすいシステムを官民連携でつくり、最後に活動の拠点をつくるというこの方式を長岡では実効性が高いというが、大野城市で同じようにできるのか
- ③中越地震をきっかけに、市民やNPOが育ち協働型ボランティアセンターをさせ、他の被災地への支援活動をするなど、専門性のある教育制度の成果であろう。
- ④少子高齢・人口減少社会では、市民の自立と市民との協働は必要なことであり、重要課題ではないか。

— 作成者 清水 純子 —